様式第４号の１（第９条関係）

博士（甲）論文審査及び最終試験結果報告書

2023 年 1 月 23 日

人間環境科学研究科教授会　殿

論文審査及び最終試験
主査 太田雅規
副査 道下竜馬
副査 広山茂子
副査 南里明子

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏　　名
人間環境科学研究科 栄養健康科学領域 博士後期課程	17dhe102	浜谷　小百合

審　査　論　文　題　目	小学校高学年児童の食習慣および食環境と児童のQOLとの関連
論文審査及び最終試験結果	(合)　　否

審査基準項目別の審査結果

番号	審査基準項目	評価※
1	学術上の創意工夫・新規性	B
2	得られたデータの取扱いの適切さ	C
3	先行研究の取扱いの適切さ	B
4	論旨の明確性・一貫性	B
5	表現・表記法の適切さ	B
6	構成の体系性	A

(※　各項目の評価は、A(優)、B(良)、C（可)、D(否)の４段階で行う)

博士論文提出資格取得日	2022 年 11 月 2 日
博士後期課程退学日	年　　月　　日

様式第4号の2（第９条関係）

論文審査及び最終試験結果の要旨

子どもの食生活では、朝食欠食、食事バランスの偏り、孤食といった問題が指摘されている。また、子どもの心身の健康は、食生活とともに生活の質との関わりも深く、食習慣や食を中心とした生活習慣が QOL（Quality of Life）と関連していることを示す報告が多くみられる。しかし、小学校高学年児童の QOL と食習慣の関係においては、横断的研究が多く、縦断的研究が少ないことからエビデンスは不十分である。本論文は、小学校高学年児童の食習慣、共食状況といった食環境と、児童の QOL との関連を明らかにすることを目的とした論文である。

まず第 1 章では、朝食時における児童の食習慣、大人との共食状況と児童の QOL との関係性を横断的に明らかにすることを目的とした。2017 年、福岡県内公立 M 小学校 5・6 年生児童を対象とし、食生活に関する質問紙、簡易型自記式食事歴法質問票（BDHQ)、小学生版 QOL 尺度を用いて、自記式による質問紙調査を行った。有効回答数のうち、保護者の同意が得られた児童 159 名を解析対象とした。その結果、児童の朝食時における食習慣、食環境と児童の QOL との関係性において、児童の朝食摂取頻度の多さ、大人と一緒に共食していること、朝食時の料理数の多さ、朝食時に牛乳・乳製品や果物を摂取していること、といった朝食時の充実した食習慣や食環境と児童の QOL の高さとの関係性を示唆する結果を得た。

続いて第 2 章では、5 年生の朝食・夕食時における食習慣と、孤食の状況といった食環境、保護者の食習慣と、その 1 年後の児童の QOL の高さとの関連性を明らかにすることを目的とした。第 1 章の研究調査対象であった 5 年生児童とその保護者を対象とし、57 名の児童と保護者 56 名を解析対象とした。5 年生の時の QOL 得点の中央値により、「低 QOL 群」、「高 QOL 群」を作成し、2 時点間の QOL 得点の高低の変化により、「QOL 低値維持・低下群」、「QOL 高値維持・上昇群」の 2 群に分け、児童の食習慣、孤食状況、保護者の食習慣との関連について検討した。その結果、児童が朝食を毎日食べる食習慣は 1 年後の児童の QOL の高さの維持や向上と関連があること、保護者の朝食を毎日食べる習慣は、1 年後の児童の QOL の高さの維持や向上と関連があり、児童が朝食を毎日食べる習慣との一致性があったことから、児童の QOL 向上には保護者の食習慣が重要であることが示されたとしている。

本論文は、子どもの QOL 向上のためには、学童期の望ましい食習慣及び食環境が重要であり、さらには、学童期の子どもを持つ保護者の望ましい食習慣の重要性を再認識させるものである。なお、公開審査後、3 名の副査からそれぞれ質問を出し、それらに対する回答も適正に行われたことを主査・副査で確認した。

以上により、本論文は栄養学の更なる発展に十分に寄与するものであり、博士の学位（人間環境学）の授与に値すると考える。